



自然と人間、その関係の変移

田口 洋美 (COE共同研究員 / 東京大学大学院新領域創成科学研究科・博士課程)

1 はじめに

現在、日本列島の人口は約1億2,780万人であり、その歴史始まって以来の人口数の頂点にある。しかし、数年後には減少に転じることが明らかとなっており、100年後は約8～7000万人にまで減少すると予想されている。このため日本列島の自然は、現時点において過去に例を見ない人為的圧力による負荷を負っていると考えられる。近年の野生鳥獣に関する保護管理問題は、鳥獣保護と狩猟による駆除といった対立軸が明瞭となる中山間地域の問題として扱われがちであるが、このような問題は都市生活の繁栄や生活経済と無縁ではない。なぜなら、都市は野生鳥獣との関係が顕在化している中山間地域、近郊農村地域等を周辺に配する同心円の空間構造のなかで守られているといえるからである。仮に少子高齢化現象が現状のまま推移し、数年後に列島の人口数が減少傾向へと転じるとすると、中山間地域の廃村化現象と共にこの問題が都市周辺の近郊農村地域においても発生する可能性を有している。人口の減少が顕在化する中山間地域においては、若年層の労働力の低下に伴う耕作放棄、管理放棄される農耕地山林が増加傾向を示し、生態系の回復にはかなりの時間を要するとしても漸次自然(野生)の状態へと遷移していくことが予想され、すでに現実のものとなっている地域も散見される。

昨年、中部地方以西の日本海側で生じたニホンツキノワグマによる同時多発的な出没問題もこうした人為的圧力の低下後退と深く関わっている。中山間地域は、とりわけ戦後の高度経済成長期から若年層の人口流出にともなう世帯数減少、過疎化が叫ばれてきたが、バブル期以降は高齢化にともなう戸数減少、廃村化の動きが顕在化してきている。自然に対する人為的圧力の低下後退は、過去において人々が開拓し生活上維持管理されてきた耕地の荒地化・森林化を促し、これまで持続されてきたと考えられる人々と周辺の自然との緊張関係の崩壊を意味している。我々が今日目の当たりにしている中山間地域や都市近郊の農村地域の景観上の漸進的变化は、国土構

造の変革期を告げるものといってよい。そしてこの変化は私たち自身と自然の関係の変化をも意味している。

2 開拓の歩みと狩猟

日本列島は農耕化による開拓開墾によって拓かれてきた。湿地や潟を埋め立て、森林を伐り拓き、自然を人為的な空間に換えてきたのである。列島の農耕化は、それまでその場に生息していた野生鳥獣を追い払い、排除し、人為的空間から押し出す圧力を保持することによって達成され維持されてもきた。昭和6(1931)年、民俗学の創始者柳田國男は『明治大正史世相篇』のなかで次のように述べている。

野獣野鳥の物語が既にローマンスに化したといふことは、我々に取つては大きな事件であった。明治に生れて大正に老いた人たちは、大抵は眼のあたりに此推移の跡を経験して居る。《中略》鳩や雉山鳥も皆同じことだが、以前は動物社会には週期的の盛衰があつた。何か好い事情があると暫らくの間に繁殖し、やがて其害がひどくなつて盛んに捕獲せられ、忽ち減少してまた次の機会を持つたのである。それが或小鳥のやうに種も絶えるやうになつたのは、決して狩獵家と鐵砲のみの罪では無い。つまりは人間の土地利用が、追々彼等の生息を不可能ならしめて居たのである。ちやうど家々の鼠と同じやうに、言はゞ我々の敵意が強くなつたのである。しかも最近の狩獵制度が、それ以上に我々と鳥獣との間を、疎隔させたことも事実である。銃獵は結局他處の紳士たちの、税を拂つて楽しむ遊戯になつてしまつた。土地に生まれた者は其捕獲にすらも関係なくなつた。魚と蟲とはまだ友だちだが、鳥獣は追々に少年の興味の領分から逸出しようとして居る。天然記念物の保存法が、辛うじて其根絶を防止する以前から、彼等はもうとくに我々の「風景」の中に居ないのである(柳田 1963:233-234)。

現代、一般の人々の狩猟に対する理解は、狩猟が銃器

等を使用し野生鳥獣を殺傷する行為であるため、非日常的でしかも残虐で非人道的なものとして敬遠する傾向にあり、また列島の社会は農耕に依拠し発展してきた社会であるから狩猟という営みは異質なものであるとする見方すらある。しかし、列島において展開されてきた狩猟は、柳田國男が指摘したように農耕地の開拓史と深く関わりつつ、農耕と狩猟が相補的な関係を保つことで持続されてきたところにその特徴があると、筆者は考えている。むしろ農耕は、農作物に害をもたらす野生鳥獣の排除を前提として成立してきたとはいえ、狩猟は鳥獣害に対する抑止力として機能してきたと考えられる。ここでいう相補的な関係とは、見かけの上では矛盾しているかのように思われる二つの論理が、実は矛盾することなく互いが統一的に共存し補い合う関係を指している。狩猟と農耕という一見あい矛盾するような生業を統一的に共存させてきたのは、ひとえに自然の圧力（野生鳥獣の繁殖力や鳥獣が人為的な空間に進入しようとする運動など）に対抗しながら持続的で発展的な農耕を営んできた我々自身の生き方に他ならない。

近代の資本主義化、世界市場に組み込まれて以降、狩猟は捕獲する毛皮資源によって国際毛皮市場と強く結びつき、国家の外貨獲産業として奨励され、周辺国家との戦争関係のなかで軍用防寒毛皮の獲得を目的に管理されるようになる。その過程で、狩猟は農耕との関係を維持しながらも市場の需要に応えるための経済的行為、換金生業として、あるいは商業狩猟の道へと歩みはじめる。明治期においては北海道などの大規模な開拓開墾と本州などにおける干拓事業、火山地周辺の高標高部にあたる高原地域での開拓農村の形成などによって、より野生鳥獣とのせめぎ合いが表面化した地域においても農耕上の抑止力として狩猟の重要性が増していった。さらに、近代においてはこのような開拓開墾による農耕の拡大と野生鳥獣とのせめぎ合い、外貨獲得のための換金型の狩猟が連動するなかで、法制度の整備も進められてきた。

3 関係の変化

ところで、山形県高畠町在住の椿勉氏は、近年の野生動物の村里出沒問題の要因のひとつとして人間と犬との関係の変化を挙げている。1960年代後半から狂犬病や生ゴミを食いあらし伝染病の感染源となる恐れもあり、非衛生的であるとし飼犬には定期的な予防接種が義務づけられ、鑑札がつけられ、放し飼いは禁止されるようになった。各自治体がゴミの収集を始めるようになってか

らは、どのような村であっても犬は鎖で繋がれるようになった。そして犬の役割はあくまでも番犬、または愛玩動物として人間の心を癒すことに重点が置かれるようになり、飼い主のマナーが問われるようにもなった。

ところで近世に書かれた紀行文などを見ると、村の周辺の田畑にイノシシやシカなどの野生動物から作物を守るために番小屋が建てられており、夜通し村人が小屋へ詰めて、田畑を監視していたことが分かる。そして番小屋には必ずといっていいほど犬が飼われていた。鈴木牧之の『秋山記行』は、文政11(1828)年に書かれたものだが、この中にも「小屋掛けは雪消え次第にかけ、休みところにいたし、七、八月時分イノシシ、サルノ類が沢山出て食い荒らすゆえ、昼は女、夜は男が番して、犬を連れておくに、獣さえ見ると吠え追ひゆくなり」という記事が見える。

近世から近代における犬の役割は、村から外部、周辺の野生へ向けられていた。犬たちの縄張り意識を利用し、人間の生活空間に進入して来ようとする野生動物を外へと追う役割が与えられていたのである。しかし、近世において長所として理解されていた犬たちの縄張り意識が、現代の社会では人間にも危害を加える可能性があるという理由で欠点として理解されるようになった。さらには、群をつくって行動する犬たちを引き離し、個別化することによって本来彼らがもっていた集団による力を解体した。人間の変化は、犬たちの長所を欠点に変えたのである。彼らは人間と野生との間に立って、ある時は狼の伴として、ある時は家畜を守るアシスタントとして、さらに家長の留守を守るために、絶えず人間生活の傍らで、その役割を果たした。高度成長期を端境期として、犬たちと人間の関係は変化し、徐々に野生動物たちも村里との間合いを詰めてきた。確かに野生動物の村里への出沒は、犬の問題だけではない。過剰な植林や自然林、二次林の喪失、高齢化、そして郊外の拡大など、その他幾つもの要因からなる相乗的なものであろう。しかし、犬の事例は人間の自然に対する認識のあり方が無意識のうちに変化してきたことを物語っている。人間と自然の関係を理解するためには歴史社会的コンテクストという視点が重要な意味を有することになる。

参考文献

- 柳田國男 1963(1931)『明治大正史世相篇』
『定本 柳田國男集』第24巻 pp.127-414 東京：筑摩書房。
初出は朝日新聞社